国際関係学部 1990-2010 ——発展の 20 年

国際関係学部長　永綱　憲悟

「国際関係の 20 年」といえば、すぐに想起されるのは、歴史家Ｅ・Ｈ・カーの『危機の 20 年、1919-1939』であろう。この本は「戦争の暗影」が世界をおおうなかで執筆され、その校正の真っ最中に第二次大戦が勃発した。この書においてカーは第一次大戦終結以来の 20 年間の国際関係史を次のように眺望した。

「危機の時代は、歴史の過程ではめずらしくない。しかし、1919 年から 1939 年への 20 年間にわたる危機には独自の特質がみられた。前半の十年に夢見られた期待が、後半十年のわびしい諦めへと変転し、現実にはさして考慮をはらうこともしなかったユートピアから、そのような思考の要素をすべて厳しく排除するリアリティへ急降下していった」（井上茂訳、岩波文庫、406 頁）。

もともとこの書は、「大学生を対象とした国際関係論の入門書」となる予定であったが、議論の白熱化により、内容ははるかに先鋭化されたものとなったという（ジョナサン・ハスラム『誠実という悪徳、Ｅ・Ｈ・カー 1892-1982』現代思潮新社、105 頁）。実際、第一章「新しい学問のはじまり」では、国際政治学（国際関係論）が誕生するに至った背景事情が説かれており、入門書的性格も留めている。だが中心部は、プラトンからモンテスキュー、ニーバー、果ては荀子に至るまでの政治思想を縦横無尽にとりあげつつ国際政治における道義と権力の問題を取り扱った——昨今の話題にそって言えばサンデル教授の「正義論」にも匹敵する——興味深くかつ複雑な内容になっている。冷戦終了後の 20 年間の国際関係をカーの手法に従って分析してみたい誘惑にかられるが、それはこの小論の範囲をはるかに逸脱することになる。

さて、「国際関係学部の 20 年」である。カーの眺望した 20 年と異なり、

これを「発展の20年、1990-2010」と呼びたい。この20年で3,655人の国際関係学士がこの学部から生まれた。その全員が、英語のネィティヴ・スピーカーとの毎朝の会話訓練を経て、大多数が米国ワシントン州立大学に5ヶ月間留学し、帰国後は、インドネシア語、ヒンディー語、アラビア語などの、他の大学ではそう簡単には学べない言語を含めて、全員が一つはアジア言語を勉強した。そして、多くの授業を受ける中で、自らが重要と考える国際関係のテーマを選択し、ゼミで報告し、討論を経て、2万字以上（後に字数基準はやや緩和された）の卒業論文を全員が執筆した（ワープロの無かった時代には、修正液を手元におきつつ、原稿用紙との格闘作業だった)。

むろん学部で学んだことのすべてが社会において役に立っているわけではないだろう。しかし3,655人の学部卒業生たちは、米国での生活や、最初はチンプンカンプンの語学授業やレジュメ作りの苦労を、多くの学友の顔と共に、今はなつかしく思い出してくれることだろう。そして未知の世界、知らない言語、新しい学問に挑戦し、時に頓挫し、最終的に課題を達成した体験が、彼らが生きていくうえでの有形無形の力となっていることを実感しているはずである。多彩な分野で活躍する、このような卒業生の存在こそが学部の宝であり、また発展の証に他ならない。

こうした20年の伝統を築き上げることが出来たのは、卒業生自身、そして彼らの学生生活を支えていただいたご家族のおかげである。また学生と教員とが授業に心おきなく専心できるよう周辺環境を整えてくれてきた事務職の方々の尽力によるところも大きい。そして学生たちを厳しく、しかし愛情をもって指導していただいた諸先生方にも感謝しなければならない。幾人かのお名前をあげさせていただく。学部創設当時の学長であり、自ら国際関係論研究者として、学部の基本枠組みを構築された衞藤瀋吉先生、また初期の学部の柱であった中野泰雄先生、そして学部には所属されなかったが学部の基礎となった経済学部国際関係学科の土台を築かれた板垣與一先生。これらの先生方は、残念ながらもはや鬼籍に入られてしまったが、ここで学部20周年に至ったことをご報告し、感謝の意を表明するとともにあらためてご冥

福をお祈りしたい。

ついで、すでに大学を去られてはいるものの、ご健在な先生方の中から何人かお名前をあげさせていただく。学部長として学部を牽引いただいた飯島正先生、間苧谷榮先生、高殿良博先生。学長在任時に学部を支えていただいた鯉渕信一先生、また国際交流委員長そして副学長として学部をバックアップいただいた川口博久先生。全員のお名前をあげることはできないが、すべての先生方に謝意を表し、あわせて学部に対して引き続き叱咤激励のほどをお願いしたい。また、共通教育ご担当の先生方、そして非常勤で教壇に立たれ熱心にご指導いただいてきた先生方にもお礼を申し上げなければならない。国際関係学部の20年はまさに、これら多くの人々の努力によって築かれてきたということを肝に銘じ、この先20年、40年とさらなる学部発展を目指すことが私たちの使命であろう。

最後に、「発展の20年」の中身を少し吟味しておきたい。再びカーに倣えば、「前半の十年」は「創造と整備」に焦点があてられ、「後半の十年」は「修正と模索」に力が注がれてきたと言えるだろう。前半においては、新学部を作るというフレッシュな雰囲気の中で、授業やゼミの基本内容を構築していった。経済学部国際関係学科に属していた先生方、教養部やアジア研究所に属されていた先生方、そして外部からいらした先生方が一緒になって学部を作りあげていった（後に分属という形で教養部から来られた先生方を含めて、多様な意見を自由に述べあいつつも、学部一致協力の精神が保たれてきた。守るべき伝統である）。

後半の十年には、いくつかの事情で運営や教育方法に修正を余儀なくされた。平たくいえば、以前よりも多人数の学生を、以前よりも少ない数の教員で指導せざるを得なくなった。あわせて、いわゆる「学力低下」により、基礎的な読解力が十分とはいえない学生も出現してきた。上述の論文分量基準緩和などはこうした事態への対応の一部であった。また英語教育の成果を明確にするために外部検定試験での得点達成を評価基準に組み入れる試みも行われた。学内的にも対外的にも、教育の成果をより目に見える形で示す事が

求められるようになり、そのための模索が始められたのである。

このような模索の中から生み出されたのが二学科構想である。既存の国際関係学科と並んで、「多文化コミュニケーション学科」を新たに設置し、国境を越える人的交流や文化接触を中心に研究教育し、さらに現場体験を重視することで、精神的に強靱で、しかも柔軟な適応能力を備えた人材を育てる、という構想である。この構想は学内的にはほぼ了解を得られ、今後は文部科学省申請に向けての準備に入るところである。この新学科を起爆剤とし、学部は「模索」からもう一度「創造」のプロセスに進むことになる。冒頭で触れたカーの著作は、「これからの平和を担う人々」に献じられたものだった。この先、国際関係学部は、二学科体制のもとで、「これからの平和と国際協力、そして多文化交流を担う人々」を数多く育てていかねばならない。皆様方の引き続きのご理解とご支援をお願いして筆をおくこととしたい。